Nitobe College, Hokkaido University

北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワーク誌

ACROSS

2021年9月1日発行

No. 2

北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワーク誌

ACROSS

〈目次〉

1. 「ACROSS」に寄せて
2. 同窓生の近況
3. 教育プログラム―学部教育コース
4. 教育プログラム―大学院教育コース
5. 新渡戸カレッジの現況
6. フェロー・メンター・教員の紹介
7. 協定校からのメッセージ
新渡戸カレッジ同窓生の皆さんへ
ウェブサイト・フェイスブック
アドレス紹介

①イチョウ並木黄葉
②花木園の新渡戸稲造像
③農場の羊群

「ACROSS」に寄せて

北海道大学新渡戸カレッジ副校長
弥（ゆはず）　和順（かずより）

旧五千円札には、新渡戸稲造の肖像とあわせて太平洋を中央に配した地球がデザインされていました。これは、いうまでもなく、新渡戸が 21 歳、東京大学の選科生を志願したとき、試問にあたった外山正一（とやまさかず）教授との問答中に発せられた言葉「太平洋の橋になりたいと思います」に因んだものです。その経緯については、24 年後に新渡戸が執筆した『帰雁（きがん）の蘆（あし）』の「洋行の動機」に詳述されています。それによれば、新渡戸は、続けて「日本の思想を外国に伝え、外国の思想を日本に普及する媒酌（ばいしゃく）になりたいのです」と述べたとあります。つまり、新渡戸の発言には、決して自己中心的な願望ではなく、日米両国のために進んで貢献したいという高邁な志が宿っていたことを読み取れるのです。

さて、この言葉は、たとえば、盛岡城址公園内にある記念碑やカナダのブリティッシュコロンビア大学における新渡戸記念庭園の石碑に「願はくは、われ太平洋の橋にならん」と刻まれるなど、広く世に知られています。しかし、よくよく考えてみれば、外山教授との問答中、果たして新渡戸が「願はくは、われ太平洋の橋にならん」と、漢文訓読調の表現を用いたか、疑問です。140 年近く前のこととはいえ、「太平洋の橋になりたいと思います」と、口語で語ったと考えるのが、自然でしょう。では、なぜ文語表現が使われたかというと、後に碑文として相応しい格調高い美文が求められたからではないでしょうか。そうだとすれば、「願はくは、われ太平洋の橋にならん」とは、碑文の制作に当り、作為された文章である可能性が高いといわざるを得ません。

ひるがえって、北大キャンパスのポプラ並木横の花木園にある新渡戸稲造顕彰碑に目を転じてみましょう。ここには、英語で “I wish to be a bridge across the Pacific” と明記されています。これこそ、本誌名「ACROSS」の典故となった一文です。それでは、なぜ英文が採用されたのでしょうか。その建立に携わった本学名誉教授の三島徳三先生によれば、新渡戸の著作を隈なく探しても、文語表現が見当らないので、“The Japanese Nation”（邦訳『日本国民』）の序文における英語文に基づいたと述べておられます（『新渡戸稲造のまなざし』（北海道大学出版会）参照）。要するに、不確かな表現を軽々に援引するのではなく、著作の中から、新渡戸が確かに記した一文を忠実に選出したのであり、まさに学者としての深い識見が発揮された結果であるといえるのです。

こうしてみると、新渡戸の名言には深い真意がこめられていたこと、またそれを正しく伝承しようとした先達たちの学識ある判断の存したことが垣間見えます。われわれは、これらを心に刻みながら、この比類なき特別プログラムにおいて、新たな挑戦を続けていきたいと思います。引き続き、新渡戸カレッジへのご協力ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

◆同窓生の近況◆

スウェーデンで学び、探究する

重井真琴
Swedish University of Agricultural Sciences
2013年度　新渡戸カレッジ　第1期生

北海道大学の工学部および国際食資源学院を経て、現在スウェーデン農業科学大学（SLU）で修士課程を終えようとしている重井真琴です。修士課程では水土環境に関する知識や研究を、講義や実験実習を通じ様々な視点から学びました。修士論文ではバイオ炭（Biochar）を用いた小規模分散型の排水処理について1年かけて研究しました。この8月からは、同分野のウプサラ大学博士課程で4年間研究を続けます。スウェーデンの場合、博士課程は雇用される形が一般的で学費も必要ないため一つの就職先というイメージになります。

コロナ禍だったこともあり、この2年を経て感じた自分自身の変化は、セルフケアと自立の重要性を改めて痛感し実践するようになったことです。論文研究の進め方も日本とは異なり、各学生によって発表や提出、卒業のタイミングが違うため、英語のカリキュラム名通りまさにIndependent projectという印象でした。また研究指導にあたるSupervisorとは別に、成績評価をするExaminerの先生、学生のペアとして論文にコメントしたり発表時に質問をしたりするStudent opponentがいることも新鮮でした。今後も多くの事を吸収し精進して、研究生活を続けていきたいと思います。

今後に繋がってゆく新渡戸カレッジでの経験

平　亨
（独）石油天然ガス・金属鉱物資源機構技術センター
2013年度　新渡戸カレッジ　第1期生

新渡戸カレッジ1期生OBの平亨と申します。大学院修了後、油開発の仕事をしています。現在の就職先は、カレッジのプログラムの1つである「対話プログラム」において、フェローとの面談を通じて、価値観・将来性等を鑑みて最適な就職先の1つとして見いだされました。フェローの中には学生生活では通常お会いできないような役員クラスのOB・OGの方々も多くおられ、そのような社会経験が豊富な方々からのアドバイスを以て、今後数十年をうらなうファーストキャリアについて、ある程度精度をもって解を導けたことはかなり大きかったのではないかと感じています。

また、私が学部生の時に、これも新渡戸カレッジの一環で、1年間のアメリカ留学を経験させていただきました。留学先では主に専門分野である地球物理学に関して学び、一現地学生として授業・実習に臨み、アメリカのみならず様々な国の学生・教員と授業内外でやりとりするといった貴重な経験をすることができました。現在の就職先でも、博士課程への留学、海外事務所での勤務といった道もあり、留学の経験を踏み台にして今後このようなことにもチャレンジできるのではないかと思っています。

変わっていく勇気を忘れずに進み続ける

三嶋　渉
国土交通省気象庁
2015年度　新渡戸スクール　第1期生

チームで合理的な選択を繰り返し、成果に結びつけていくことのハードルの高さと面白さ、を感じていました。大学では、同じ分野で、意思疎通のとりやすい人に囲まれて生活していました。こういった同類の世界も大事であると感じつつ、多様な人と交流する世界に足を踏み入れることができたことを、大変に貴重な機会を得たと思っていました。チームで取り組んだワークの結果は、自分では想像できなかった結論ばかりで、多視点で成果を作り上げることの面白さを感じました。

社会に出てからも大事にしていることの一つは、自己の力を社会に還元しようということです。身近なことは世界にも通じている、と意識して行動しています。自分やチームメンバーが時間と労力を費やしていることは、一体社会のどういう立ち位置にあり、どう社会に貢献するのか、ということを立ち返りながら、仕事の方針や発信の方法を軌道修正しています。魅力的な経験をされている方とお話しすると、自分の視野は狭いなと感じることが多くありますが、そういう方の話を刺激にしながら、実践を積み重ねていき、ブラッシュアップした日々で頑張っていきたいと思います。

経験は、活かして初めて糧となる

長島（豊田）めぐみ
日本たばこ産業株式会社（JT）
2017年度　新渡戸スクール　第3期生

私は医薬品研究開発の探索部門で仕事をしています。創薬研究の最上流を担う職場では、新規な疾患治療薬創出のために闊達な意見交換が求められますが、ベテラン研究員に対し若手の私が意見するなど畏れ多いと、入社当初は戸惑う時期もありました。ですが、専門性や考え方の異なる方々と1つのプロジェクトを遂行するという新渡戸スクールでの経験を通じて、他者の意見を理解し受け入れ、且つ自身の能力をチームに活かす力を身に着けられたおかげで、すぐ環境の変化に適応できたと感じています。現在は臆することなく立案し、他研究員とともに一丸となって研究を進める楽しさを実感する日々です。

社会還元という観点では、私は依然として未熟な部分が多く、目下の仕事に精一杯になってしまうことが少なくありません。ですが、自分が属する環境の外に目を向ける意識を持たせてくれたのも新渡戸スクールだと思っています。特に印象に残っているのはシリア難民に関する講義で、私が如何に閉鎖的な世界しか知らず、関わる世界がどれほど狭いかを認識するとてもいい機会となりました。課題は多くありますが、いずれは画期的な医薬品を開発し、世界に貢献することが当面の目標です。

教育プログラム紹介——学部教育コース

■グローバル基礎科目

基礎プログラムの必修科目で、仮入校の1・2年次生が履修します。春ターム「国際理解と海外留学」では国際経験の豊富な講師陣によるオムニバス講義、夏ターム「リーダーシップとチームワーク」ではグループワーク中心の授業を行っています。2020年度は急遽オンライン授業に切り替えたことで、教員と学生間のコミュニケーションが大きな課題となりました。今後は、質疑応答の同時配信やチューターの導入を通して、履修生に対する一歩踏み込んだサポートを目指したいと思います。

■フェローゼミ

フェローによる、世界が抱える諸問題から持続可能な社会のあり方を考え、リーダーシップやチームワークを身につける演習形式の科目です。2020年度はZoomによる同時配信授業のためコミュニケーションの難しさが課題となりましたが、全体発表会では対面とZoomの併用によりすばらしい発表と活発な質疑応答でしめくくることができました。今後は、オンラインの利点も利用し改善をはかっていく予定です。

■セルフキャリア発展ゼミ

自らの未来を構築する力を養うための、フェローと学生同士による集団的伴走支援型のキャリアセミナーです。これまで合宿を含み日常と異なる空間で自己洞察を図り行ってきましたが、2020年度はオンデマンド講義とオンラインの質疑応答とグループワークにより実施しました。パンデミック下で学生が大学以外の社会でどのような変化が起きているのかを知り、人生設計を見直すよい機会となりました。また新渡戸ポートフォリオ活用により、学生の日々の取り組みをフェローからフィードバックしていただきました。

■対話プログラム

カレッジ生がフェローと一対一で対話し、リーダーとしての資質を磨くプログラムです。2020年度はメッセージの交換とZoomによる対話を実施しましたが、それぞれ従来の対面での対話に比べ、不自由さや困難がありました。一方、オプションが増えたことで、より多くの人が各自の事情に適したものを選んで参加する形ができました。今後は、改善をはかった上で、複数のツールによる対話を実施していきたいと思います。

■海外留学

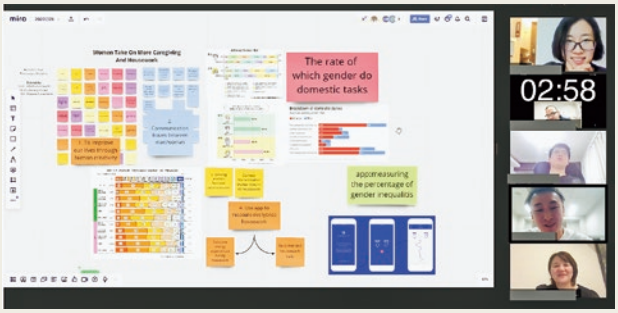
海外留学はカレッジ生の国際性涵養を目的とした必修科目であり、短期留学スペシャルプログラム（短期SP）、国際インターンシップ（国際IP）、学部専門レベル短期留学、交換留学があります。2020年度はCOVID-19感染拡大により渡航中止となり、短期SPと国際IPのオンライン授業を除き、すべてのプログラムが実施できませんでした。ここでは短期SPのオンライン授業を紹介します。2020年度春季の短期SPは、アラスカ大、ワシントン大およびブリティッシュコロンビア大の教員等によるオンライン授業を実施しました。具体的には、①オンデマンド講義、②TAを含むグループ・ディスカッション、③講師との直接質疑応答を1セットとする授業を2週間（14セット）行いました。ビデオ講義は何度も事前に視聴できることから、理解度が深まり、講師とも活発なディスカッションができました。

教育プログラム紹介——大学院教育コース

新型コロナウイルスの影響により2020年度の授業は全てオンラインで行いました。ZoomのBreakout Room（BR）やオンラインソフトMiroによるホワイトボード、新渡戸ポートフォリオのチームワーク機能などを利用したチームディスカッションの実施、各チームへの外国人TAの配置による異なる視点からの助言の付与、英語でのディスカッションの活性化などの工夫により、内容を大きく変更することなく授業を実現できました。またオンライン化により、国内外のさまざまな場所から学生や講演者の授業参加が可能となりました。学生からは「オンラインでも議論ができることに自信をもった」など、肯定的な感想を数多く得ました。一方、BRに分割することにより他チームの状況把握が難しくなり、チーム間の相乗効果をどう高めていくかが課題としてあげられました。今後は、進捗共有の機会を増やすなどの対応を検討して行きたいと思います。

■大学院基礎科目Ⅰ･Ⅱ —チーム学習の基礎･実践

大学院基礎科目Ⅰでは、創造的思考、批判的思考、リーダーシップや専門職倫理などを題材として、チームワーク能力を伸ばす授業を重点的に行いました。大学院基礎科目Ⅱでは、チームで効果的・効率的に協働するためにプロジェクトマネジメントの基礎を学び、2つのプロジェクトを行いました。一つは、新渡戸カレッジへの応募者数を増やすプロジェクト、もう一つは北大を難民キャンプとして開放するプロジェクトです。難民問題は分野横断的かつ深刻な社会問題であるため、個々の学生の専門知識だけでなく、創造的・批判的思考が問われました。メンターより予算見積りなどの現実的な側面も考えるべきなどの指摘を受け、プロジェクトにリアリティを持たせることができました。



■大学院発展科目Ⅰ･Ⅱ —課題解決･問題発見

大学院発展科目Ⅰでは、テーマの大枠をSDGsと定め、“Problem Solving the Game Changer”（春ターム）、“Socially Vulnerable People under COVID-19”（秋ターム）に取り組みました。起業家精神の内容を新たに加え、ビジネスの視点で課題解決策の実効性についても考えました。大学院発展科目Ⅱでは、“Sustainable City - Sapporo”（夏ターム）、“Future City Development towards SDGs in Hokkaido”（冬ターム）から着想されるプロジェクトを実施しました。フィールド調査ができないため、電話、Zoom、メール等によるインタビュー調査で得た一次データを分析し、解決すべき真の問題を探索しました。これらの経験を通じてフィールドワークの固定概念を打破し、困難な時代の新たな常識を考える機会を得ることができました。

■メンターフォーラム

「キャリアパスとキャリアチェンジから得たこと」と題して、メンターによる講演と交流会をオンラインで実施しました。フォーラムを通じて学生は、大学での研究活動や今後の就職活動への取り組み姿勢、将来のキャリアデザインについて貴重な示唆を得ることができました。

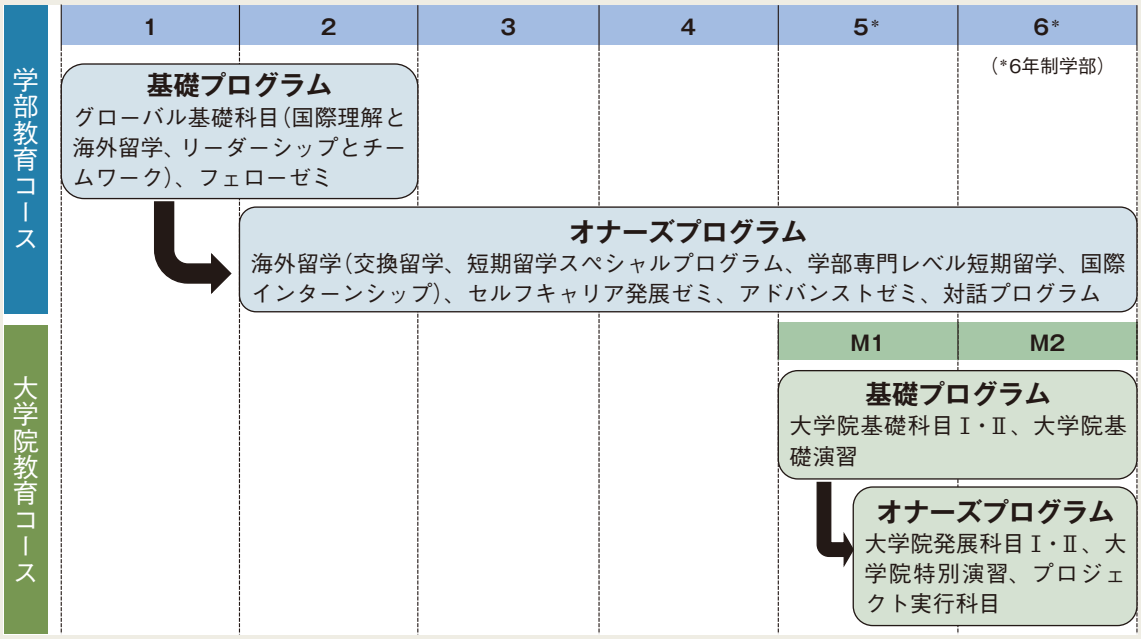
■大学院特別演習 —Hult Prizeチャレンジ･企業課題解決演習（DEMOLA）

Hult Prizeチャレンジでは、学内大会において新渡戸スクール・新渡戸カレッジ大学院教育コース修了生が参加するチーム「FLOAT MEAL」が優勝しました。独自の垂直水耕技術による新たな雇用の創出とCO_2排出削減を目指しています。DEMOLAでは、学生と企業人でチームを構成し、企業が抱えるビジネスの課題に対する解決策の立案をして参加企業にプレゼンしました。企業が解決案を受け入れ、ライセンス契約にまで至るケースもありました。

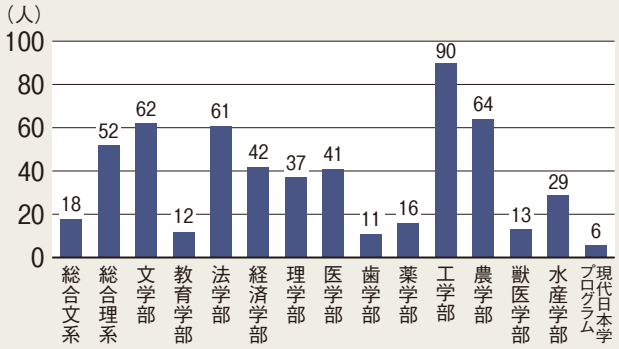
Credit：Hult Prize
@北海道大学

Credit：DEMOLA HOKKAIDO

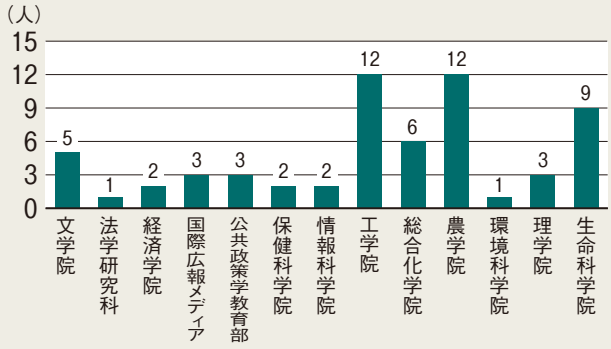
新渡戸カレッジのオリジナル教育プログラム



●2020年度学部別在籍者数(合計554名)

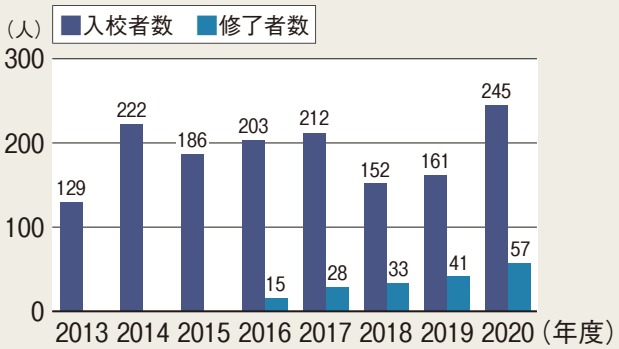


●2020年度学院別在籍者数(合計61名)

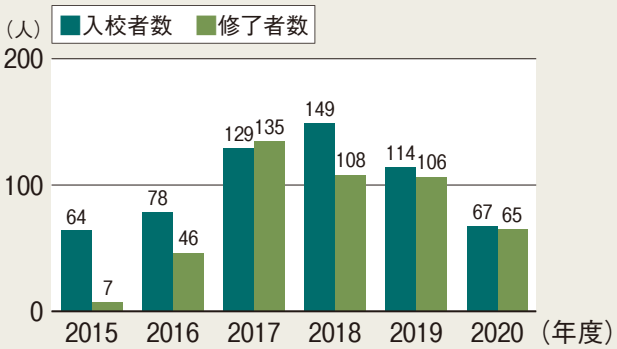


●入校者数と修了者数

■学部教育コース



■大学院教育コース



●学部教育コース修了者の進路

一般企業	15名
官公庁	4名
進学	35名(国内33名、海外2名)
未定	3名

●大学院教育コース修了者の進路

一般企業	8名
官公庁	1名
進学	5名(国内4名、海外1名)
在学中	51名

フェロー・メンター・教員の紹介

手に入れたい未来の実現に向け、自分軸を見つけよう

森　順子
フェロー
(株)ハッピーアロー

在学中に目指したい方向性、すなわち「自分軸」を見つけることが、自分の未来を切り拓く一助になると考えています。私の場合、東京の私立大学を出たあと、岩手と北海道のテレビ局でアナウンサーを務めました。テレビ局退職後は直接伝える仕事を希望し、地理やビジネスマナーの講師に転向。学生さんと接する中で教育の大切さに気づき、「教育で貢献する」という軸が生まれました。その軸が見えてから、教育サービスの会社を起業すると同時に、北大大学院教育学院に社会人入学し、生きる力を育む「キャリア教育」の研究を行いました。修了後は大学院の学びを活かし、教育イベントの開催や講演など幅広く活動をしています。

例えば「人の役に立ちたい」という軸から看護師を目指したものの、実際にはなれなかった場合でも、その軸を持ち続けることで教員や政治家、開発者など、新たに目指したい目標が見えてきます。在学中に、自分が何をしているときにやりがいを感じるのかを探究してみると、「自分軸」が見えてくるのではないでしょうか。

未来を切り拓くためには、新たな発想も大事です。多様な分野の人と接して視野を広げ、どんな荒波が訪れても「自分軸」を持って、手に入れたい未来を実現することを願っています。

グローバルな視野を持つクロスオーバー・リーダーに

山下　直樹
メンター
財務省

グローバル化やデジタル化といった急速な社会変化の中で、これまでのように各分野に分かれた縦割り構造に沿った政策形成は、機能しにくいものとなっています。むしろ様々な分野を横断的に跨ぎ、かつ国内課題と国際課題の両方を視野に入れられる人材が、かつてなく求められています。また、社会サービスをより質の高いものとすべく、行政と民間を行き来できる人材や環境も必要です。従来型の官民をキッパリ分ける発想では、次のステージに進めません。それぞれの知恵を融合し、新たな「公共」を生み出していくことが求められます。さらには、アカデミックな世界とプラグマティックな世界をつなぐ発想も不可欠です。実社会でのインパクトを考えない学問でも、学問の発展を活かさない実務でもなく、両者をうまくコーディネートしていける人材が、今後の社会のキーです。

要は、様々な分野をクロスオーバーできるリーダーが価値を持つ時代。国内にある日本企業に就職したとしても、これまで自分が触れたことのない未知の社会課題を背景にしたビジネスをグローバルに展開する、こうしたことが当たり前になっています。新渡戸カレッジは、まさにそうしたグローバル・リーダー、クロスオーバー・リーダーを輩出する場だと思います。志高く、北海道から世界へ目を見開いてください。

特任教員

荒井克俊(Ph.D.)
特任教授
水産学(魚類発生生物学・遺伝学)

内田治子(Ph.D.)
特任准教授
教育心理学

繁富(栗林)香織(Ph.D.)
特任准教授
マイクロ・ナノ工学、折紙工学

島田和久(Ph.D.)
特任准教授
政治学

畑中貴美(M)
特任講師
欧州研究

肖　蘭(Ph.D.)
特任講師
教育学

シュルーター智子(Ph.D.)
特任助教
宗教学

王　倩然(M)
特任助教
教育学(社会教育・生涯学習学)

フェロー＆メンター

フェロー

石川めぐみ
CJコミュニケーション　代表

石川裕一
(株)ぶらう　代表取締役社長
ジョンソンコントロールズ(株)
取締役

伊藤　慎
大塚製薬(株)　医薬品事業部
マーケティング担当　アソシエイトディレクター

井上修平
元双日執行役員　顧問
元シンフォニア・テクノロジー
取締役

上田英樹
日本情報通信(株)　上席執行役員
コーポレート企画部長

大塚榮子
北海道大学名誉教授

大友俊彦
中外製薬(株)　オンコロジー
LCM部長

帰山雅秀
北海道大学名誉教授

萱野　聡
(株)サクセスボード　代表取締役社長

工藤文粛
双日(株)　北海道支店　支店長

佐々木亮子
(株)アークス　取締役

志済聡子
中外製薬(株)　執行役員　デジタル・IT統轄部門長

柴田哲史
佐藤工業(株)　札幌支店　技術部長

渋江隆雄
元三井金属鉱業(株)　執行役員

島田元生
(株)ビスキャス　非常勤顧問

高野文彰
高野ランドスケーププランニング(株)　取締役会長

多田幸雄
(株)双日総合研究所　相談役

玉城英彦
北海道大学名誉教授

戸田守道
戸田建設(株)　取締役　専務執行役員

萩野　泉
(株)電通クロスブレイン　データユーティリゼーション1部　部長

日野峰子
会議通訳者

廣重勝彦
(一社)日本社債調査センター
代表理事

藤田信良
(一社)セレッソ大阪スポーツクラブ
理事
(株)セレッソ大阪　取締役相談役

松尾　望
(一財)知的財産研究教育財団
知的財産研究所　上席研究員

三村直己
ウィンボンド・エレクトロニクス(株)
ゼネラルマネージャー

村山和佳
(株)ズコーシャ　技術部課長

森　順子
(株)ハッピーアロー　代表取締役

メンター

石川憲一
スリーエムジャパン(株)　取締役
常務執行役員

Eric Ofosu-Twum
(株)日立製作所　研究員

黒田垂歩
レオファーマ(株)　LEO Science & Tech Hub シニアディレクター

越　直美
三浦法律事務所　パートナー弁護士
OnBoard(株)　代表取締役CEO

佐伯百合子
(株)資生堂　研究員

附柴裕之
(株)Savon de Siesta　取締役会長

中島　徹
15th Rock Ventures Founder & General Partner
Spirete(株)　代表取締役

中原　拓
メタジェンセラピューティクス(株)
代表取締役社長
(株)ファストトラックイニシアティブ　ベンチャーパートナー
遠友ファーマ(株)　取締役

長堀　紀子
北海道大学人材育成本部　特任教授
遠友ファーマ(株)　代表取締役

萩野　泉
(株)電通クロスブレイン　データユーティリゼーション1部　部長

藤井幸大
サンマルコ食品(株)　専務取締役

前田美紅
(株)ニトリホールディングス　組織開発室キャリアデザイングループ

三嶋　渉
国土交通省気象庁

山下直樹
財務省　主計局主査

Abhijeet Ravankar
北見工業大学　准教授

和田義明
衆議院議員

略語：(株)株式会社、(公財)公益財団法人、(一財)一般財団法人、(一社)一般社団法人

協定校からのメッセージ

David W. Valentine

Professor
University of Alaska, Fairbanks

An early American philosopher, Ralph Waldo Emerson, wrote that “the mind, once stretched by a new idea, never returns to its original dimensions”. That is what Nitobe College seeks to do, through exposing students to new environments, people, ideas, and approaches. I think that has been especially true for the Hokkaido University students that have participated in the Summer Short Term Educational Programs hosted by the University of Alaska Fairbanks. And although very little of what students experienced in Alaska was familiar to them, it was clear they enjoyed themselves as they learned about issues both universal and unique to the far north. As a result of their experience in Nitobe College, students have a greatly expanded view of the world of possibilities open to them.

初期アメリカの哲学者エマーソンは、「精神は一度新しい考えにより拡張されると、決して元の次元にもどることはない」と述べています。新渡戸カレッジがアラスカ大学フェアバンクス校と共同で展開している短期留学スペシャルプログラムは、正しく極北初体験の北大生にとって新しい環境、人びと、考え、アプローチを通して普遍的でユニークな学びと経験を知る喜びにつながり、自分たちに開かれた可能性と世界の大きさを感じさせていると確信しています。

Ricardo Mata-Gonzalez

Professor
Oregon State University

The Nitobe College represents a bright spot of education at the world level. Nitobe College students have the great opportunity of feeling the world from very different international perspectives. In a world of virtual realities the Nitobe College makes possible the very real personal and cultural experiences that provide opportunities for students to find their true global leadership vocation. At Oregon State University we believe in building cross-cultural bridges. We are proud to collaborate in the Nitobe College endeavor because we share the mission of helping people to build dreams and create the world they want to see.

新渡戸カレッジは、常にさまざまな国際的視点から世界を俯瞰するチャンスが与えられるハイレベルな教育プログラムであり、カレッジ生が実際の個性的且つ文化的な経験を通して、真のグローバルリーダーシップとしてのキャリアを提供しています。オレゴン州立大学では異なる文化への橋渡しとして、カレッジ生が夢と希望をもって新しい世界を切り拓くための手助けをしたいと思います。私たちは、このような共通のミッションのもと新渡戸カレッジと協働して高い目標に向かって進むことを誇りに思います。

新渡戸カレッジ同窓生の皆さんへ

北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワークへの登録をお願いします！

- 下記の新渡戸カレッジのウェブサイトまたは QR コードから登録をお願い致します。
- ここで得た情報は、個人情報保護法に基づき、当ネットワークが厳格に保守管理し、本人の同意なく外部へ提供することはありません。

https://ws.formzu.net/fgen/S23755582/

ウェブサイト・フェイスブックのアドレス

●ウェブサイト　「新渡戸カレッジ」 https://nitobe-college.academic.hokudai.ac.jp/
●フェイスブック「新渡戸カレッジ　Alumni Association」 https://www.facebook.com/nitobecollege/
「Hokkaido University Nitobe College Alumni Network」 https://www.facebook.com/groups/hokudai.nitobe.alumni.network/

北海道大学新渡戸カレッジ同窓ネットワーク（HU-NCAN）
北海道大学新渡戸カレッジ推進事務室　〒060-0817　北海道札幌市北区北17条西8丁目　TEL: 011-706-5414　E-mail: ncan@academic.hokudai.ac.jp

2021年9月1日発行